ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.4 (2) 2012

寄稿

シンポジウム「日本現代化の過程，経験および教訓」の総括

劉岳兵[1]

2011 年 4 月 2 日，南開大学日本研究院と教育部人文社会科学重点研究基地にも指定されている南開大学世界近現代史研究センターは，「日本現代化の過程，経験および教訓」と題するシンポジウムを合同で開催した．シンポジウムには，中国社会科学院，北京大学，北京外国語大学，中国政法大学，首都師範大学，山西大学，中南民族大学，南開大学，天津社会科学院，天津市社会科学聯合会，天津師範大学，天津外国語大学の研究者たちや，世界知識出版社，『世界の歴史』，『国外社会科学』，『読書』，『日本学刊』，『南開学報』などに携わる出版業界・学術雑誌の責任者たち，そして『日本現代化の過程研究』叢書の作者あわせて 60 名以上が参加した．

シンポジウムでは，2010 年 12 月に出揃った世界知識出版社出版の『日本現代化の過程研究』叢書全 10 巻に対する講評を皮切りに，最近日本で起こった大地震および放射能漏れ事故といった最新の状況もあわせて，日本現代化の過程，経験および教訓について活発な討論が行われた．

叢書の主編者である楊棟梁教授は基調報告のなかで，「現代化」という概念についての新たな見解と，それを叢書のなかに反映させるための努力について詳細に説明した．楊教授の説明によれば，わたしたちの理解している現代というのは，わたしたちが生活しているこの時代のことであり，「当代」という言葉と基本的に同じ概念である．その上，現代化（Modernization）は，その起源，カテゴリー，内容，性質などほとんど全ての面で「近代化」の意味するところと多くが「重なり合い」，そしてその「延長線」上にある．しかし，一方では「資本主義化」の思惟パターンにとらわれてはいない．

「現代化」とは，ン類が近代以来の封建的生産様式と伝統思想を捨て，より高度な物質文明，精神文明そして社会制度（制度文明）を追求する過程である．この過程は，資本主義的な工業文明，政治文明そして社会制度を絶えず改善し続けるだけでなく，同時に非資本主義的な本質，すなわち人類社会をより高度な発展の次元へと導く新たな要素をも育み，創り出している．したがって，現代化とは「近代化」の延長でもあり，近代化を越えるものでもある．この意味において近代化，すなわち伝統的な意味における資本主義化は，現代化の主な内包を構成するが，すべてを代表することはできず，より広範な視野をもつ現代化のなかに収まらざるを得ないのだと言える．

このような理論的視座から出発して，楊教授は以下のように強調する．

人類は資本主義の出現を起点とする現代化の過程において，イギリス，フランス，オランダを代表とするオリジナルモデル，ドイツ，ロシア，日本を代表とする継承モデル，インドなどの多くの植民地国家にみられる依存モデル，ソ連および中国の超越モデルを形成した．またオリジナルモデルからすれば，残りの三種はすべて「追い越しタイプ」のカテゴリーに入る．加えて，この４つのモデルの現代化の過程においては，非資本主義的な本質，

すなわち人類社会をより高度な発展の次元へと導く新たな要素を生み出す可能性が残されていると．

更に楊教授は，世界各国の現代化のモデルのなかで，疑いもなく日本こそが最も価値のある研究対象であるという．これは，日本が近代アジアにおいて唯一「近代化」を実現した国家であり，また目下のところ現代化が最も進んだ国家のうちの一つでもあるからである．更に，近代以降の現代化のなかで中国は日本に大きく後れをとっており，日本の経験は学ぶべきものである．

日本は近代において中国に最大の損害をもたらした国家であり，中国はこの「立ち退くことのない隣人」と永く付き合っていかねばならない．そのためには，日本の民族的特性と社会のメカニズムをよく理解しなければならない．「彼を知り己を知り」，「古きをたずねて新しきを知る」．そうすることによって，現代化を進めるなかで対日関係を適切に処理することができる．

日本は「後発型の追い越しタイプ」の代表であると同時に「追い越し後の苦境」に陥った実例でもある．現代化の道の上で加速を続ける中国にとっては，日本の「追い越し期」と「ポスト追い越し期」の経験と教訓から長所と短所を学ぶことは等しく重要である．

こうした楊教授の観点は，叢書の序文「日本現代化研究の視角と課題」のなかで詳細に述べられている．日本研究の先学である天津社会科学院の呂万和氏も楊教授の観点に賛同を表明しており，歴史研究は閉塞した状況を打破し，概念上の束縛から自由になってこそ，縦横無尽に思考をめぐらせ，何らかの突破が得られると強調している．

世界知識出版社は，「叢書は国際的な学界が初めて明治以来の日本の現代化の歴史を系統的に取り扱った研究叢書であり，包括的且つ系統的，学術性に優れ，中国学術界の最新の研究成果を示している」としている．

南開大学教務長の朱光磊教授は，南開大学の日本研究の伝統を回顧し，日本研究は南開大学国際問題研究における看板テーマとなっていると指摘した．そのうえで，楊教授らが10年の歳月をかけて完成させた『日本現代化の過程研究』叢書は，同研究院の全教員の力を結集したものであり，呉廷璆氏が編集した『日本史』百万字の後を継ぐメルクマール的な意義をもった重要な成果であるとしている．

中国社会科学院日本研究所の李薇教授は，叢書は中国の日本研究界において前例のないプロジェクトであり，一つのメイン・テーマ，二つの方向性，三度の制度改革，四大分析視座，五大研究領域という全体的な構想の下，各巻がそれぞれはっきりとした特色を備えていると述べる．同時に李教授は，叢書は豊富な研究成果を示しているだけでなく，今後の叢書編集，特に日本研究叢書の編集という面で貴重な学術的経験とマクロな視野をもたらしてくれたと評している．また，同研究所副所長の高洪教授は，全10巻からなるこの素晴らしい大型叢書は，中国における日本研究の新たな名著となったうえ，中国，日本，更には世界各国の日本研究者に斬新な視点を提供するものであもある，と認める．

北京大学歴史学部の宋成有教授は，日本近現代史研究の専門家として，叢書の出版が中国における日本近現代史研究全体を推進するだろうと語る．更に，天津外国語大学の修剛学長，天津師範大学歴史学院の侯建新院長，南開大学歴史学院の陳志強院長らも皆，叢書の出版は学術界にとって重要な出来事であり，一つの記念碑的成果をあげたものであると見なしている．

中華日本哲学会会長で中国社会科学院哲学研究所の卞崇道教授は，「十年をかけて一振りの剣を磨き，十の著作が新たに生まれる．

蛍雪の苦は十年にわたり，英名は代々伝えられる．」と即興の詩を詠んだ．

日本の法政大学国際日本学研究所の王敏教授は，世界における日本研究の最新動向を詳細に紹介し，特に米国ハーバード大学の傅高義教授が祖国である中国の恒久の発展と進歩のために日本研究に従事したという目的意識について重点的に説明した．彼女によれば，『日本現代化の過程研究』叢書は，中国学界の最高水準にあるだけでなく，国際的な水準に達しており，世界における様々な日本研究に対する中国からの見事な応答になっているという．王敏教授は更に，叢書は具体的な形式で，世界中が注目する問題に答えていると指摘する．それは例えば「非西洋的な価値体系の視座とは如何なるイメージなのか，如何にしてそれを体系化，理論化するのか，という問題に対して有益な検討を行っており，学術的な語りを通じて世界を思考させている」点であるという．

シンポジウムのもう一つの内容は，関連する分野の権威ある専門家たちによる，叢書の各巻に対する講評である．

呂万和氏は，米慶余教授の著書『日本近現代外交史』について，戦前戦後の日本外交について通史的史に論じていると共に，形式が整い論点も簡明であり，また重要な出来事や文書，更にはいくつかの重要な史料についても，その典拠や書誌情報を明記するなどその専門性がよく表れていると認める．また，取り扱った史料も豊富であり，特に当事者の回顧録，伝記および日本国内の文献を用いて歴史の真相に迫った点が，その説得力を高めているとしている．なかでも，戦前を扱った部分には特に高い評価をしており，戦前（1868-1945）の日本の対外関係における根本的姿勢を明らかにしていると指摘する．当時の日本の対外関係の方針をまとめれば，強兵第一として戦略の必要とするところに応じ，西洋某強国との同盟を実現し，近隣に向け不断の拡張を行い，口実をつくって侵略戦争を発動した，ということになる．そしてその結果，アジア各国から恨まれ，日本自身も辛酸を嘗め尽くし，ついには完全に失敗し，滅亡を迎えていくことになる．朝鮮侵略，台湾侵略，琉球併呑，日清戦争，日露戦争，日英同盟，日露協商を取り扱った各章は，特に優れており，著者の長年の研究成果がよく表れているとも評された．

中国社会科学院日本研究所の高洪副所長は，王振鎖・徐万勝教授の著書『日本近現代政治史』について，革新的な意義をもち，それまでの学術的空白を埋めるものであると高く評価する．高副所長は，「中国では日本政治に関する専門的歴史研究は未だに出版されておらず，特に波乱に満ちて先行きの見えなかった日本近現代政治史を系統的に整理し，幕末維新から 21 世紀初頭までの政治的発展の背景，原因，軌跡，結果について，専門的研究者や日本に関心のある一般読者を問わず示したことは，疑いもなく学術的価値のあることであり，その功績は明らかである」とも述べる．

中国政法大学の金仁淑教授は，楊棟梁教授著書『日本近現代経済史』について，日本経済史学界における重要な研究成果であり，実証的な考察と経済学的分析を結合させた研究方法を採用して，全面的，系統的に明治維新以降の日本現代化の歴史とその特質，更にはその功罪を論じているとしている．当該の著作の出版によって，日本経済の二度の成功（明治維新によって資本主義の道を歩み，第二次大戦後にアメリカに次ぐ先進国となった），そして二度の失敗（敗戦と 1990 年代以降の長期にわたる不況）について，国内外の研究に全く新しい構想と理論的基礎を提供することになった．また同書は，中国経済の現代化のなかで，政府と市場，自由と制限，効率と平

等，発展とバランスといった諸関係により良く対処していくための重要な理論と実際の指導的意義を提供している．

中国社会科学院日本研究所の崔世広教授は，趙徳宇教授の『日本近現代文化史』について，日本近現代の文化史研究の視点から日本の現代化を論じている点が最大の特長であり，日本近現代分化しの研究を通じて，近現代における日本文化の発展の性質を見出し，日本文化の現代化および日本現代化の過程の特徴を明らかにしていると評する．同書は，系統的で詳細な研究によって，日本近現代文化の発展過程には，他文化の取り込みという姿勢に基づいた実用性，伝統文化の安定性，多元文化の並存性が常に見られると論じている．こうした結論は，客観的に日本文化と西洋文化を理解し，日本の伝統と現代との関係を理解し，日本および日本文化の現代化の特徴を明らかにするという点で，啓発的な意義を持っている．

北京外国語大学日本学研究センターの周維宏教授は，李卓教授の『日本近現代社会史』について，独自の日本（近現代）社会史の構築に成功していると述べる．具体的には，第一章で社会構造について，つまり社会学的な社会移動の問題を論じており，第二章では家庭社会学，第三章では女性社会学，第四章では労働社会学，第五章では人口社会学の内容を取り扱っている．この五章構成は，総体的な社会史研究の構成として適切なものであり，その豊富な内容は国内随一のものである．

武漢大学芸術学院の王傑泓教授は，2010 年第 8 号の『中国図書評論』に，彭修銀教授の著書『日本近現代絵画史』についての長編の論評を発表した．「現代化における“東洋”モデルと日中の結合――彭修銀氏の新著『日本近現代絵画史』」と題する論評は，「同書は国民芸術と外来芸術の融合を中心テーマ“後発追い越し型”の国家が，如何にして自我の超越と持続的発展を可能とするかについて論じており，今の中国にとって啓発的であるだけでなく，予見性さえも持っている」と指摘している．

劉岳兵副教授の『日本近現代思想史』については，早くも 2010 年 8 月 14 日に卞崇道氏が北京外国語大学日本学研究センターで同書をめぐる討論会を主宰した（討論会の報告は，2010 年 12 月に出版された日本の学術雑誌『或問』第 19 号に掲載されている），また同氏は「日本近現代思想史を系統的に論じた力作――劉岳兵の『日本近現代思想史』」と題する文章を書き同書を紹介し（『高校理論戦線』2010 年第 12 号），その開拓的な学術的価値と現実的な意義を賞賛した．

宋成有教授は臧佩紅副教授の著書『日本近現代教育史』について，特に教育と日本の国家発展との関係，日本における教育の位置づけといった日本の近現代の教育において繰り返しあらわれる問題を検討し，更には日本近現代教育発展の歴史全体について各段階ごとの分析，教育の特徴の整理，日本における教育の成否・損得の客観的評価を行った点を賞賛している．そのうえで，こうした点が著者の研究がもっている潜勢力であるとしている．

北京大学外国語学部の于栄勝教授は王健宜教授，呉艶・劉偉副教授の著した『日本近現代文学史』について，日本近現代の主要な流派，思潮，作家，作品，そして文学の変遷について広範に論及すると共に，文学の流派や思潮と社会・文化の変化との関係を全面的に描き出し各時期の文学特徴を捉えていると評している．また，読者が日本近現代文学流派の形成とその影響力，作家たちの創作背景を理解するうえで，大きな手助けとなるだろうと述べている．

首都師範大学歴史学院の史桂芳教授は宋志勇教授，田慶立副研究員の共著『日本近現代対華関係史』は卓越した専門書であると評す

る．同書は日本の対華政策，日中関係を主題に，確かな資料と独自の視点で近代以降の日本の対華政策が制定された背景，実施の過程，そして日本現代化におけるその作用を分析していると指摘する．同書は，戦略的な角度から日本の戦前戦後の対華政策に的確な判断と定義を行っており，歴代内閣の対華政策の相違点やそれが日中関係に与えた影響を分析し，錯綜する現象のなかから歴史の事実に接近している．著者が先人の研究成果を十分に利用すると共に，長期にわたって形成されてきた誤読や偏向を正したことは，近代以降の日本の対華政策を客観的に判断し，今後の日中関係を理性的に見る上で非常に参考になるものである．

シンポジウムでは，出版界及び学術雑誌の編集者らが，如何にして質の高い学術書を出版するかといったことや，読者たちが日本現代化のどのような点に関心をもっているのかといったことについて，各自の意見を述べた．経験豊富な編集者たちの意見は，研究の視野を広げるうえで非常に啓発的なものであった．また王敏教授は本叢書出版後の計画について，英訳本と和訳本を出し，英語圏と日本語圏の読者が手に取りやすいようにすべきだと提案し，時期をみて，西欧或いは日本の学者に論評してもらうべきであるとした．

列席した専門家たちは，日本の現代化に関する今後の研究理論と方法，科学技術の革新と環境保護などについて的確な意見を提起した．卞崇道氏は，この十巻の叢書は日本の現代化の各側面をそれぞれ重視しており，専門別にそれぞれ歴史的研究が行われているが，今後の横断的な研究や総合的な理論研究のための基礎をも打ちたてていると指摘する．また同時に，日本現代化の研究における空間論的視点，すなわち東アジアから全世界へと繋がるような視点の重要性を強調しており，方法論的にも革新的であるとしている．更には「日本現代化研究の学術史」の整理と研究を通して日本現代化研究の学術体系を築くべきだとも提案している．

楊棟梁教授は，各参加者の素晴らしい発言と支持に謝意を表し，このシンポジウムを通じて如何にしてこの分野の研究を今後進めていくかの見通しを得たと述べ，これも各著者および参加者にとっての大きな収穫であったとした．楊教授は，日本の現代化の道は曲折を経ており，「後発追い越し型」の経験と教訓とが並存しているという．歴史発展の「横軸と縦軸」に沿って，日本現代化の特質を把握・解析することは，単に「公正」であろうとすることだけではなく，「己を律する」ことにもつながる．日本現代化研究には更に多くの課題が待ち受けているが，今回のシンポジウムはこの研究領域で活躍している多くの著名な専門家を集めており，『日本現代化の過程研究』叢書の出版を契機として，中国における日本現代化研究は新たな境地に入ることだろう．

（翻訳：小嶋祐輔）

[1] 南開大学日本研究院.